

『薇陽学人文稿』について

— 明治中期同志社一学生の論文集 —

仲
村
研

はじめに

一 『文稿』の構成

二 平民主義思想への共鳴

三 青年の役割と死生観

四 三種人物論と英雄観

おわりに

はじめに

ここに取り上げる『薇陽学人文稿』は、学校法人同志社の前理事津下統一郎氏の御父津下紋太郎氏が、同志社普通学校在学中の一八八八年（明治二一）から翌年にかけて記した論文集である。この冊子は縦二四・七センチメートル、横一七センチメートルの大きさで、和紙と和紙の野紙を綴じこんだものである。表紙は「坂田先生闕 薇陽学人

文稿」とあり、裏表紙は「明治廿二年夏七月脱稿 洛陽同志社学院 薇陽学人」と三行に墨書されており、丁数は五九である。

この『文稿』に収録されている論文は、一七篇（うち一篇は別紙に記され挿入されている）で、これらはいずれも「坂田先生閱」とあるように、提出した論文は「坂田先生」の校閲を期したものである。一八八八年改正の同志社学院予備学部・普通学部・神学部規則によると、学院職員として漢文学教授・漢文学委員に岡山県出身の阪田（坂田ともあり）丈平がいるから、「坂田先生」とは坂田丈平のことであろう。一八八六年（明治一九）に同志社生徒で組織された講話会である興風会（翌二〇年一〇月に解散し、学友会と称す）の中心的メンバーに阪田貞之介（坂田貞之助）がおり、『同志社文学』誌上で活躍しているが、この人物は津下紋太郎の先輩であれ、論文を提出する「先生」ではなく、先述のように「坂田先生」は漢文学教授坂田丈平としてよい。

なお裏表紙にある「明治廿二年夏七月脱稿 洛陽同志社学院」とは、一八八八年（明治二二）六月に、同志社英学校と同志社予備校とが併合されて「同志社学院」と称され、学院内に予備学部・普通学部・神学部の三学部がおかれたものを指している。この同志社学院は一八八九年（明治二二）九月にその名称が廃止されて、三学部は同志社普通学校、同志社神学校、同志社予備学校に分離したが、同年七月には同志社学院は存在していたのである。

以下、人名は敬称を省略することを予め断っておきたい。

一 『文稿』の構成

津下紋太郎の生涯については、子息統一郎氏が編纂された『津下紋太郎 自伝』（玉川大学出版部 一九八二年）

『蕪陽学人文稿』について

がある。この『自伝』によって簡単に履歴を紹介しよう。

津下紋太郎は一八七〇年（明治三）四月七日に岡山県児島郡天城村（現、同県同郡藤戸町大字天城）で出生した。天城村は池田藩の分家が家臣団とともに居住した土族町で、紋太郎は反土族意識の強い祖父の影響下で育ったといわれている。一八七四年（明治七）にかつて土族子弟の漢学塾であった静修館の小学校に入学し、下等小学四年、上等小学四年を卒業した。紋太郎の父は農家の出身で津下家に養子に來た人であったが、祖父の考えに共鳴して、紋太郎の教育に積極的であった。一八八五年（明治一八）に一六歳で上級小学を卒業するが、その前年の夏、同志社の神学生亀山昇の天城村への伝導にさいし、知遇をえてキリスト教信仰への門を叩き、同年冬に岡山市内の教会で金森通倫から受洗した。一八八五年春、

学科	学期			
	第一期	第二期	第三期	第四期
修身	聖書	一全上	一全上	一
国語及漢文	史記十伝作文	二孟子作文	二全上	二
英語及英文	読方会話作文	五全上	四全上	四
数学	幾何	五全上	五三角法	五
歴史	万国史	五全上	五	五
博物			植物動物	五
体操	普通兵式	四全上	四全上	四
合計	六	廿二*	六	廿一

*この所には「廿一」とあるが、合計実数を記入しておいた。

親類縁者の嘲笑をうけつつ、両親の理解に支えられて同志社普通科生一年生となる。同年九月調の普通科一年生六九名のうちに波多野培根の名とともに記載されている。また一八九〇年五月調の学生名簿に、普通科五年生二八名のうちに、その名が認められている。

一八八八年六月改正の普通学

部三年生のカリキュラムは前掲のようである。

これによると、国語及漢文は第一期には週二時間、史記十伝・作文、第二期には週二時間、孟子・作文、第三期も同じであった。当時の普通学部では言論・文章が重視された。それはたんにカリキュラムとしての国語及漢文だけではなく、課外の演説会における雄弁術を通じて言論・文章力の向上が重視された。津下紋太郎は『自伝』の中で次のように述べている。⁽⁶⁾「学生の言論文章の自由を尊重することも亦他校に見られぬ校風であった。言論文章の自由は演説会の奨励となり、各クラス間の雑誌発刊となって現われた。土曜日曜の晩は必ず演説会が開かれて、先生が出席して学生の演説後批評を下して雄弁術を鼓吹したものである」とあるように、演説会と言論・文章にたいする学生の関心は、カリキュラムにおける国語及漢文の学力を向上させていったと推定される。雑誌『同志社文学』の発行は、その意味から学生を刺激する格好の材料であった。事実、「社会上ニ現ハル、槓杆的元理」という題の論文の末尾に、津下紋太郎は「右ノ一篇(論)ハ今日同志社演舌会ニ於テ演セシ演舌ノ草稿ニシテ文字不整頓写字不分明ナル処アラン、願クバ御推読ヲ乞フ」と記しており、この論文が演説会の草案そのものであり、草案そのままを坂田文平に提出し、批評を求めたものであることがわかる。右のように断つてはいないが、論文中に多数数の前で演説した内容のものがあ

ることは容易に推定されるところである。

一、及是時

明治二十一年一月一日

二、青年ノ養フベキ最要ノモノ

月日不詳 三年生

三、死論

明治二十一年二月二日 三年生

四、比較論

月日不詳 三年生

- 五、源頼朝論
月日不詳 三年生
 - 六、彼得大帝論
(明治二年) 二月一日 三年生
 - 七、理論家ト実際家
(明治二年) 五月一七日 三年生
 - 八、送旧学年
月日不詳
 - 九、伸縮論
月日不詳 四年生
 - 十、本校漢文学処法
月日不詳 四年生
 - 十一、本条君ノ高島ニ往クテ送クルノ序
月日不詳 四年生
 - 十二、明治廿二年後ノ貴族社会
(明治三年) 一月一日 四年生
 - 十三、官校私校優劣論
(明治二年) 一月七日 四年生
 - 十四、社会上ニ現ハル、楨杆の元理
明治二年一月八日 四年生
 - 十五、政党論
月日不詳 四年生
 - 十六、化学ヲ読ンテ所感ヲ述ブ
六月分 四年生
 - 十七、吾党青年ノ責任
五月分 四年生
- 以上、一七点の論文の作成時点は、一八八八年(明治二一)十一月一日から翌年七月までとあるが、一八九〇年九月の同志社普通学校の学校暦から推定すると、四年生は一八八九年九月から一八九〇年六月までであるから、『文稿』の裏表紙の年月日より一一か月あとの一八九〇年六月までの原稿が綴じられているものと解せられ、綴じ込む順序も前後錯簡がある。

坂田丈平先生に提出された論文は、末尾に「伏乞 校正 乱筆御免」「伏乞」「伏乞 斧正」と文章の点検を要請

している。これを受理した坂田先生は「95」「8」「9」のように算用数字で点数を付け、文章にも傍点を打ったり、抹消したり、欄外に感想を記している。第一論文には「著眼高超」「論旨筆態準美」、第五論文には「行文簡淨」、第七論文には「理論實際、合同之理、分離之由、兩說得分明、不生支蔓」と評記が付されている。第一二論文は「先掲此一語故終篇論理整々不紊」と欄外に記され、第一三論文の末尾の「嗚呼私立校ナル哉、私立校ナル哉、有為活発天真爛慢タル平民主義ノ人物ヲ出シ、吾同胞三千八百万余中、可憫ナル多数ノ人民ヲ救ヒ、國家ヲ泰出ノ安ニ置クモノハ、其レ只タ私立校ナル哉、嗚呼私立校起ヨ、汝デ起ラズンハ、是ノ蒼生ヲ如何セン」について、坂田文平は「是レ以下ハ削除スル方宜シキヤニ思フ」と記している。第一三論文には末尾の行間に「提一橫杆、貫透諸現象、論理尤分明、可謂作者亦能用橫杆於文章者也」と評し、第一七論文に対しては、末尾に「一段將サニ終ラントスレバ、既ニ後段ヲ引起ス、段々繩聯シテ説キ去ルハ、此篇布置ノ宜ヲ得ルナリ、而シテ或ハ感慨、或ハ沉着抑揚昂低ノ間、能ク読ムモノ、感ヲ起スハ節奏ノ妙カ」と評している。加えて評者は、論文のうちの強調点や問題箇所は朱で傍点を振ったり、明らかな誤字を訂正している。

なお第二論文「青年ノ養フベキ最要ノモノ」は、『自伝』によると、添削して「明治ノ青年須ラク自由ノ元氣ヲ養成スベシ」と題して『同志社文学』第一一号（明治二十一年三月二七日）に発表されている。また『文稿』には収録されていないが、津下紋太郎は『同志社文学』第六七号（明治二十六年七月二〇日）に「告別之辭」を掲載している。これは同年六月三〇日の卒業式に陳述したものであり、また同誌第六八号（明治二十六年八月二〇日）に「神学校」を掲載している。

二 平民主義思想への共鳴

『文稿』収録論文のうち、第一二論文「明治廿二年後ノ貴族社会」を紹介しよう。序論で津下は、貴族を皇族・華族（諸侯・公卿）とし、士族・平民を平民と規定する。第一章「廿二年後の平民社会」では、明治維新と平民社会の形成との関係を次のようにいう。

平民社会豈ニ反動シ活動スルノ力ナカンヤ、^(ラ脱カ)其ノ間隙無カリシナリ、然ルニ夫ノ維新ノ革命ハ、則チ平民ノ再膨脹スルヲ得ルノ好間隙ヲ与ヘシモノナリ（中略）此ノ如ク過去ノ平民社会ト現見ノ平民社会トヲ以テ、将来ノ平民社会ヲ推ストキハ、平民社会ノ将来天下ニ勢力ヲ得ルニ至ルヤ蓋シ明白ナル事実ナラン、殊ニ来年開カルベキ國家ノ如キ、正ニ是レ平民社会ノ権力ヲ政治上ニ發揮スルノ一大好機會ト云フベシ、吾人ハ吾国平民社会ノ為メニ賀セザルヲ得ザルナリ。

と、平民社会成立の契機が維新革命にありとして、その到達点が一八九〇年の国会開設であると評価している。

これに対して、第二章「明治廿二年後ノ貴族社会」では、

噲令家ハ藤原氏ノ末流ナルモ、源氏平氏ノ子孫ナルモ実力ナキモノ何ヲカ為サン、止ムヲ得ズ、天下ヲ拳ケテ平民社会ノ手ニ譲ラザルヲ得ザルニ至レリ、今日廟堂ニ坐シ、又民間ニアリテ天下ノ要路ニ当ルモノハ、夫ノ長紬者流ノ人々ニ非ラズシテ、反テ衣ハ臚ニ至リ、紬ハ腕ニ至ルノ平民社会出身ノ人々ナルヲ見テテ、猶ホ貴族社会ノ勢力ナキヲ知ルニ足ルベシ、知ルベシ今後貴族社会ノ運命ハ今ノ如何ハ今後平民社会ノ運命如何ニヨリテ、

と、貴族は平民社会の拡張によって、過去の圧制、専横、退廃によって「優勝劣敗生存競争」に敗れるという運命を

たどらざるをえないと指摘している。この論文は平民を士族・平民と規定したところに特徴があるが、士族と平民とを何故に同一階級と捉えるのかは明確ではない。

次に第一三論文「官校私校優劣論」を紹介しよう。この論文ははじめに「我国ニアリテ官校ノミ独リ教員整ヒ、器械全備シ、其ノ他建築構造ノ美ヲ尽シテ、私立校ノ微トシテ振ハズ」という、物質的には官校が優勢であることを認めたらうで、私校の必要性を述べる。

官校ハ官校的人物ヲ造リ、私校ハ私校的人物ヲ出ス、官校的人物トハ如何ナル種ノ人物ナリヤ、官権主義并ニ貴族主義^{主義}ハ官校ノ人物トハ如何ナル種ノ人物ナルカ、平民主義并ニ民権主義ノ人物是レナリ。

と官校が官権主義・貴族主義の人物を育成し、私校が平民主義・人権主義の人物を育成することを鮮明にしている。そして「官校ハ物質的ニ於テ私校ニ勝リ、私校ハ精神的ニ於テ官校ニ勝リ、二者長短共ニ存セリ」としている。両者を比較検討して次のようにいう。

之レヲ草木ニ喩エレバ、精神的教育ハ根幹ニシテ、物質的ハ枝葉ノ如シ、又之レヲ蒸気船ニ喩エレバ、精神的ハ恰モ蒸気器^機ノ如キモノニシテ、物質的ハ此レニ付属スル小器械、小器具^具ノ如キモノナリ、然ラバ、二者ノ輕重較セズシテ自カラ明カナリ、精神的、物質的二者ノ輕重既ニ明カナリ、官立校、私立校ノ優劣、又較セズシテ明カナリト云フベシ、

もちろん、私立校の優性を主張している。同志社学生津下の意気ごみの程が察せられるとともに、一八八九年（明治二二）前後の同志社の精神支柱が学生の中にどのように確立しているかを如実に示す事例であろう。時恰も同志社大学設立運動が新島襄を先頭に展開されている時代であるから、同志社の学生たち個々が私学存立の意味を認識していたとしてよいであろう。恐らく津下のこの考えは同志社学生の共通の思想であった。

一八八九年（明治二二）の津下紋太郎の社会思想には平民主義—私学—同志社という連鎖がある。その連鎖の環の中に第一五論文「政党論」がある。津下は「吾人々類社会ノ中ヨリ競争ナル二字ヲ除去セバ、吾人ノ社会ハ忽チニシテ停滞的ノ社会ト為ルベシ」と、競争原理が社会の進歩を促進させるといい、政党についても「数多ノ政党相并立シテ互ニ相競争スルニ於テハ、互自相戒メ、為メニ各自ノ進歩ヲ来タスノミナラズ、一社会ノ進歩ヲ来タスニ至ルベシ」とする。そして国会開設に希望を託して次のようにいう。

回顧スレバ、明治十四年吾賢明ナル皇帝陛下^(皇)ハ、二十三年ヲ期シテ国会ヲ開クノ詔ヲサレ、爾来天下政党ノ論盛ニ起リ、自由党起リ、改進黨起リ、保守党・自治党接各腫ヲ接シテ起リ、各々旗幟ヲ一方ニ翻カヘセリ、余ハ吾國人ノ実ニ政治上ニ熱心ナルヲ喜ブモノナリ、余ハ諸党ノ増々勉強シテ国家為メニ尽サレンコトヲ希望スルモノナリ、然レトモ吾人ハ同時ニ此等諸党カ自党ノ盛大ヲ希望スルノ余リ、国家チユウ二字ヲ忘却スルコト無キヲ望マザルヲ得ザルナリ、

として「社会ノ安寧ト人民ノ幸福」のために、政党の秩序ある競争を期待すると結んでいる。津下によると、米国における独立党と共和党、英国における保守党と自由党とのように、「各党互ニ相口論スルノミナラズ、終ニハ干戈ニ訴ヘテ其ノ勝敗ヲ決セント迄為スノ極端ニ陥ル、終ニ天下ヲ乱ダスニ至ル」ことのないことを願望している。

このような強い社会的関心は、この時に雑誌『日本人』に発表された社会問題化した高島炭鉱事件へ当然のように目を向けさせている。第一一論文「本条君^(君)ノ高島ニ往クヲ送クルノ序」はこの事件にたいする考えを表明している。

「炭坑ノ工夫」は健康な肉体の持ち主であるにかかわらず「彼等ノ目ハ自由ニ物ヲ見ル能ハズ、彼等ノ口ハ自由ニ語ル能ハズ、彼等ノ耳、彼等ノ鼻、彼等ノ手、彼等ノ足ハ皆ナ自由ニ其ノ用ヲ為ス能ハズシテ、夫ノ蕭寂タル孤島場裏^(裏)牛ノ如ク、馬ノ如ク、籠中ノ鳥ノ如ク、盤中ノ魚ノ如ク、空シク晏天ニ号泣スルニ非ラズヤ」として、明治政府が幾

百の視察員を派遣しても窮状を救済できないだろうから、本条君のような「志士」を派遣し、「人情ヲ知ラザル豺狼^(豺)的ノ徒」である納屋長や、「無学蒙昧東西ヲ弁セザル野蛮的ノ輩」である工夫を「真理ノ光ヲ仰キ自由ノ空氣ヲ呼吸」せしめるようにすることが、本条君の責務であると述べている。

ここでは残忍猛悪豺狼の納屋長を温和博愛の人物とし、籠中の鳥、盤中の魚にたとえられる工夫を青天白日、自由の身へ転ずることは、志士の教化によるほかなしという、きわめて精神主義的な発想が根柢をなしている。明治中期の急速な資本主義化によって惹起する人間疎外の現実、非人間化の問題を、納屋長、工夫の啓蒙化によって対処しようとしたところに第一一論文の特徴があり、本条君を「精神一到何事カ成ラザラン」と鼓舞したのである。

三 青年の役割と死生観

第一四論文「社会上ニ現ハル、楨杆的元理」、第一六論文「化学ヲ読ンテ所感ヲ述ブ」、第一七論文「吾党青年ノ責任」は、青年が平民社会の中心となり、平民主義の推進力となるべきことを提言している。

まず第一四論文は「楨杆ノ功能ハ小ナル力ヲ以テ能ク大ナル働キヲ為シ、微ナル働キヲ以テ能ク偉ナル功ヲ奏スルニアルナリ」とし、「兎ニ角文明ノ進歩社会ノ運轉ハ楨杆的^(作)佐用ニ由リテナルモノナルヲ、前述ノ議論ニ由リテ略ボ明[■]白ナラン」と、その事例として、文明的器械のみならず、思想面においても楨杆的作用のあることをみる。すなわち、「ルーサーハ宗教改革ナル楨杆ヲ用キテ、以テ宗教社会ヲ運動セシメ、スペインセル、ミルハ學術ナル楨杆ヲ以テ學術社会ヲ動カシ、主基督ハ救チユウ楨杆ヲ以テ^{用キ以テ}天下ノ人心ヲ運轉セシメナリ」とし、「茲ニ^{此等}此ノ楨杆ヲ使用スル力ハ必要中ノ最モ必要ナルモノト云ハザルベカラズ、而シテ此ノ力トナルモノハ果シテ何ゾヤ、則チ英雄之レナリ、

然ラハ此ノ英雄ハ果シテ何処ニ之レヲ求ムベキヤ、則チ吾人青年^{中ニ之レヲ}ニ求メザルベカラザルナリ、青年ノ責任モ又大ナリト云フベシ」と記して、青年の中から国家を動かす英雄の出現することを待望している。

第一六論文は、宇宙は七〇余の元素間に存在する親和力によって成立しているとし、「此ノ親和力ナルモノ、独リ宇宙ノ現形ノ保ツニ於テ必要ナルヲ感スルノミナラズ、又社会ノ秩序ヲ保チ、国家ノ安寧ヲ来スニ於テモ、其ノ必要ナルヲ發見ス、夫レ国家ハ一ツノ宇宙ナリ、人民ハ是レ国家ヲ組織スルノ元素ナリ、而シテ此ノ人民ナル元素ヲ相連統セシメテ一ツノ組織アル国家ナル宇宙ノ作ルニ至ルモノハ、是レ則チ人間ニ存在スル親和力ナリ、何ニラカ人間ニ存在スル親和力ト云フヤ、曰ク、人間ニ存在スル相愛スルノ情、及ヒ人間ニ存在スル共同一致ノ精神はニナリ」として、学者と不学者、権力者と無権力者、富者と貧者、貴族と平民とは国家のために共同一致すべきことを提言する。そして、共同一致の親和力を養成するものは基督教とする。第一に文明人・野蛮人、白人・黒人、男・女、老・幼や身分、職業の差異なく、「主ノ心ヲ以テ心ト為シ」、第二に隣人愛をあげ、この二つが「基督教ノ国家ノ親和力ト為ルニ大要点」という。しかし、現実には「吾邦人ハ今ヤ共同一致ノ精神ニ乏シク、相愛スルノ情ニ疎シ」という状態で「之レヲ救治スル其レ只タ基督教アルノミカ」といい、基督教を国賊と文明の敵とする世情を慨嘆している。

第一七論文は、悲惨をきわめた南北戦争が奴隷解放には一定の役割を果たしたことを認め、ひるがえって、南北戦争から数十年を経た時点の日本社会にも自由を束縛された監獄囚がいるが、それ以上に思想の束縛の及ぼす害があることを訴え、「良心ノ束縛ニ至リテハ只タニ国ノ滅亡ヲ来タスニ止マラズ、容易ク吾人ヨリ永遠無窮ノ生命ヲ奪ヒ去ラントスルモノナレバナリ」と良心の自由の大切さを述べている。続いて「今ヤ幸ニシテ吾同胞中ニハ肉体ノ奴隷ト為リテ束縛セラル、モノ無ク、思想ノ束縛ヲ受ケテ悲ムモノナリ、殊ニ来年ヨリハ国会ノ開設ノアルアリテ、大ニ政治上ニ自由ヲ得ントセリ、吾人ハ此レニ向フテ一言スルノ要ナキヲ感ズ、唯タ吾人ノ歎スルモノハ、所謂良心ノ自由

ヲ奪ハレ、悪魔ノ奴隸タルノ兄弟ノ多キヲ是ナリ」と慨嘆する。そして悪魔の奴隸から同胞を救出する人物を何処に求むべきかについて「吾人ハ之レヲ青年ノ内ニ求ムルノ外、他ニ道ヲ知ラザルモノナリ、吾人青年ノ責任美ニ重且ツ大ナリト云フベシ」と、青年の役割の重大なることを訴え、自らが第二のマルチン・ルターとなり、第二の南北戦争を起こして、同胞を悪魔の奴隸から救出しなければならぬと言っている。この第一七論文は『文稿』に収録された論文中で最も充実した論文であり、良心の自由を論理と感情との両面より説いたものであり、明らかに演説の草稿であることがわかる。坂田丈平が先にも紹介したように「或ハ感慨、或ハ沉着抑揚昂低ノ間、能ク読ムモノ、感ヲ起スハ節奏ノ妙カ」と評しているように、演説か、発声して読む文章として記されたものである。

第一四・一六・一七論文は、三年生の論文と比較して構想のうえからも、論理や感情注入の点からも明らかに優れている。これら三論文では青年の気魄と良心の自由の運用を論理的に記述しているが、そのことは、すでに第二論文「青年ノ養フベキ最要ノモノ」で、青年は「人ノ為メニ其ノ主義ヲ庄セラレザルノ氣、所謂、自由・独立ノ元氣」をもつことが重要で、「青年ノ自由元氣ノ盛ナルハ、正シク将来一國自由元氣ノ盛ナル」ことであるとして、新日本の養うべきは「自由ノ氣」であることを訴えている。その文章は感情的であり、第一七論文のような豊かな構想の中に訴える熱情とは異なっている。英国史、米国史上の自由の問題を取り上げ、日本社会における自由の欠如を愁いて青年の奮起を要請しているが、その論理はきわめて単純で、構想も第一七論文と比較すると、自由の内容の何であるかが不足している。ここに津下紋太郎の成長の軌跡がたどれるのである。

一八八八年（明治二一）一月二日の脱稿した第三論文「死論」は、宗教者が遭遇する永遠の課題である死について考察した論稿である。天地間に存在するものは有限であり、かつ変遷、進化すると認識し、「真ニ天地万有ハ流レ来リ流レ去リ、亦流レ来リテ止ム時（符カ）キ無シ、嗚呼天帝ノ撰理驚クベキ哉」とし、「此ノ千變万化ヨソ社会進歩ノ母、

人間生活ノ基ヒ、吾人幸福ノ源泉タルナリ」という。そして進歩は現世にとどまらず、靈界への進化を期待する。「吾人ノ当ニ向テ進化スベキハ靈界ナリ、靈界トハ何ゾヤ、抑モ人類ハ靈肉ニ大元素ノ集合体ナルヲ以テ、何時カ此ノ分子離散ノ期無カラザルベカラズ、此ノ期ヲ云ヒテ死ト云ヒ、而シテ其ノ一分ハ土ニ帰シ、一分ハ天ニ帰ス、其ノ天ニ帰スルヲ名ツケテ靈界ニ進化ストハ云フナリ、而シテ其ノ靈界ニ進化スルノ階梯ハ何ゾヤ、死則チ是ナリ」と、死とともに肉体は土に帰し、魂は天に帰し、この「天ニ帰スル」ことを「靈界ニ進化ス」としている。津下紋太郎のこの論文で主張するところは「吾人ハ能ク死ノ価値ヲ記憶シテ、亦能ク天命ヲ知り、亦能ク死ニ処ゼンバアラザルナリ」と最末尾で記しているように、基督教的死生観というよりは、有限の生命をいかに価値あるように生き抜くかという、青年らしい人生観がこの論文に表現されている。

四 三種人物論と英雄観

津下紋太郎は『文稿』の中で二編の人物論を叙述している。第五論文「源頼朝論」、第六論文「彼得大帝論」がそれで、ともに三年生の時の作品である。歴史的人物論は叙述する人の世界観、人生観を直接表現する。すなわち、歴史上の人物をいかに見るか、いかに捉えるか、共鳴するか、憧憬をいだいているか、それらの点が人物論を吟味する場合の読者の尺度になる。

まず「源頼朝論」を紹介しよう。人が津下にたいして、源頼朝を「英傑」とすべきか、「徼々タルノ一小流人」とすべきかという問題をたてて「英雄」と捉えることを告げたのに、津下は「故ニ余将ニ言ハントス、頼朝、義経等ニ命ジテ平氏ヲ討滅スト言ハンヨリ、寧ロ義経等、源氏ノ嫡宗頼朝ヲ推シテ主ト為シ、平氏ヲ討滅スト言フノ勝

レルニ如カズト、義経等ノ功此ノ如ク其レ大ナリ、然ルニ頼朝鎮々タルノ小怨ヲ以テ、功臣骨肉ナル義仲ヲ殺シ、範頼ヲ害シ、義経ヲシテ猶ホ生ヲ全フスルヲ得ズ、衣川一片ノ塵ト化セシメタリ、(中略)加之、其ノ兵ヲ挙グルヤ名ヲ勤王ニ借リテ実ハ私利ヲ営ム、天網仄々粗(振々疎)ニシテ漏サズ、宜ナル哉、千年万苦シテ組織セシ覇業忽チ地ニ落ち、子孫其ノ跡ヲ断ツニ至ルヤ、嗚呼、頼朝モ亦一正夫ニ過キザル、悪ソゾ英傑ト為スベケンヤ」とし、「英傑」ではな
いと結論したといふのである。「一正夫」に過ぎない理由は、源氏一族が嫡宗という理由で頼朝を指導者に推挙した
のに、平氏に勝利すると、一族を滅ぼして覇業を継承することを不可能にしたという理由である。そして津下は「頼
朝ハ只々之カ率先者タルニ過キズシテ、喩令、頼朝無キモ諸源豈ニ黙スニ付センヤ、必ズ大敗裂ニ至ルヤ必セリ、而
シテ其ノ弊甲羸馬ヲ以テ、能ク平氏ヲ討滅セシメタルキハ、頼朝其ノ人ノ力ニ頼ルニ非ラズシテ、義経・義仲等与テ
力アルナリ」と断言している。平氏政権打倒は頼朝個人の力に負うとするより、源氏諸氏の結集が勝利の因であると
されている。鎌倉政権成立について頼朝の業績をあまり評価せず、源氏一族の力としているのは、英雄的個人よりは、
その個人を支える集団を重視するという、明治中期の社会運動のあり方の影響を多分にうけていると考えられる。

しかし、津下は英雄の国家社会に果たした役割を否定しているわけではない。第六論文「彼得大帝論」には津下の
英雄観を明確に論述している。この論文は論理的にも確固としており、『文稿』中の三年生時代の論文としては特長
あるものの一つといえる。津下は有名な人物を三種に分類する。第一種は「才能ニ富ミ知識ニ富ミ策略計謀ニ富ミ一
時天下ノ人目ヲ驚カスノ大事業ヲ成スモ、其ノ目的ト為シ主義ト為ス所、国家ノ隆盛、社会公衆ノ幸福ニ非ラズシテ、
唯タ己レノ名誉利達ヲ貪ボルニ過キズ、所謂、利己主義ノ人物」でナポレオンのような人物をいい、第二種は「其ノ
志ト為シ、主義ト為ス所ハ、公明正大ニシテ国家ノ隆盛ヲ謀リ、人民ノ幸福ヲ来タスニアルモ惜ムベシ、其ノ志ヲ成
就スルニタルベキ才能知識ニ乏シク、喩令、其ノ知識才能ハ完全ナルモ天運ノ許サルカ、将タ時勢ノ不可ナルカ為

メカ、其ノ宿志ヲ成就シ能ハザルモノ、所謂即チ志ト事業ト一致セザル者」で、楠正成、新田義貞のような人物を指す。第三種は「才能モアリ、知識モアリ、策略計謀モアリ、而シテ又其ノ主義目的モ社界公衆ノ為メ、マシテ才毫モ己レノ利ヲ營マズ、加之、其ノ事業モ首尾能ク成功シテ、只タニ一時人目ヲ驚カスノミナラズ、千歳ノ下史上ニ赫々タルノ功績ヲ在止ムルモノ、所謂即チ志ト事業ト相一致スルモノニシテ、而シテ此ノ種ノ人物コソ真ノ英雄タリ、真ノ豪傑タルナリ」と、ピーター大帝をあげている。

ピーター大帝は国家の隆盛は海運の利にあるとして、造船学、航海学を学ぶために英国と和蘭において大工などと起居をともし、「若シ帝ニシテ一片国家ヲ愛シ、人民ヲ愛スルノ精神無カリセバ、豈ニ能ク斯ノ如クナランヤ」としている。スウェーデン王のポーランド、デンマーク侵略からロシア侵入にさいし、ピーター大帝は和平を乞うた。それは平和主義から発している。そして「内政ヲ改良シテ海軍ヲ設ケ、又商業ヲ奨励シ、製造事業ヲ鼓舞シ、溝ヲ穿チ、道路ヲ修繕シ、活板事業版也ヲ拡張シ、其ノ他凡テ野蛮的ノ事物ヲ一変シテ文明的事物ト為シ、不都合ナル社会ヲ変シテ都合能キ社会ト為シ、不整頓ナル国家ヲ変シテ秩序アル国家ト為シ、愚蒙ニシテ東西ヲモ弁シ知ラザル人民ヲ変シテ知識アル人民ト為シ、以テロシア強大ノ基ヲ開ケリ」と、第三種の人物の事例にピーター大帝をあげ、「一世ノ英雄」と評価している。

この三種に分類された人物論からすると、第五論文の源頼朝は第一種の人物に類別され、ナポレオンの利己主義の人物とされ、津下紋太郎の忌避する種類の人物とされる。津下の好む人物は、その事業が「一トシテ国家隆盛ノ為メナラザル無く、一トシテ社会進歩ノ為メナラザルハ無シ」とされる英雄であった。津下は強い国家意識を尺度として、歴史的な人物を評価し、結果において、民衆運動や民衆意識を吸収するかたちで国家を確固たるものとしてゆく人物像に共鳴したのである。この共鳴は津下のもつナショナリズムの表現であり、ナショナリズムを土台とする英雄

待望論でもあった。ここに明治中期の青年学生思想と行動が要約されていると考えてよい。

おわりに

以上、『文稿』に収録されている論文の紹介を通じて、明治中期の同志社学生思想と行動をみてきた。それは『同志社文学』における学生たちの論稿と大部分重複すると考えてよいであろう。ただこの『文稿』ではわずか二年にわたる論文ではあるが、津下紋太郎個人の問題関心の広がり、問題をより徹底して追求するという思想の深まりが跡づけられるのであり、その点でこの『文稿』は貴重である。

最後に津下紋太郎のその後を『自伝』によって補えば次のようである。一八九〇年（明治二三）六月、同志社普通学校を卒業して、同志社神学校本科に入学し、一八九三年六月、同校卒業と同時に同校普通科教授に就任し、一八九八年（明治三一）六月退任するまで五年間教員生活をしている。退任した翌年六月、同志社と関係深い大和の山林王と称された土倉家の台湾植林事業に約八年間従事した後、一九〇九年（明治四二）八月に実業界に入り、日本製鉄株式会社専務取締役となり、新潟県の国油共同販売所監事を兼ね、以後、一九三七年（昭和一二）九月、六八歳で死去するまで石油事業畑を歩いた実業界の人であった。「怒らぬこと」を指針として生涯を生きたといわれている。実業界にあっても母校と関係をもち続け、一九二四年（大正一三）の同志社創立五〇年記念事業にも協力者として名を連ねている。

註

(1) 『同志社百年史 資料編一』三九三ページ。

- (2) 『津下紋太郎 自伝』四〇〇ページに簡単な履歴が紹介されている。
- (3) 『同志社百年史 資料編一』二八〇ページ。
- (4) 同書 六一ページ。
- (5) 同書 三七三ページ。
- (6) 『津下紋太郎 自伝』二二二ページ。
- (7) 同志社大学人文科学研究所『人文科学』第二号は『同志社文学』特集号であり、同誌の全号の総目次・総索引を付している。
- (8) 「本条君」は「明治廿三年五月調」の同志社神学校・同普通学校の在學生、卒業生の名簿にはその名はない。

本稿作成にあたり、貴重な史料を提供していただき、有益なご教示を賜った前同志社理事津下統一郎氏に感謝いたします。

(なかむら けん・同志社大学人文科学研究所)